

(社) 東洋音楽学会関西支部

支部だより

第19号 (1994-5-24)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のご案内

(社) 東洋音楽学会関西支部 第169回定例研究会

日時 1994年6月11日(土) 14:00-16:20

会場 大阪芸術大学 芸術情報センターAVホール(B1)  
南河内郡河南町東山 Tel. 0721-93-3781

会場への交通アクセス

近鉄「あべの橋」にて「河内長野」行き準急に乗車、「喜志」下車。  
大阪芸術大学教職員送迎バスにお乗りください。

「あべの橋」12:34発→「喜志」(芸大送迎バス)13:05発

「あべの橋」13:14発→「喜志」(芸大送迎バス)13:50発

(送迎バスは12:20、12:50発もあります。)

【研究発表】

「筆筆の演奏様式について - 『楽家録』と現行雅楽をめぐって -」

廣瀬 信夫

【連続講座】<音の今昔>

「レベティカからライカへ - グリシャ・ポピュラー・ミュージックの軌跡 -」

大東 純子

司会：小西 潤子 会場：月溪 恒子

(休憩時間には「喫茶ハマグチ」にてコーヒー・サービスがあります。

また、研究会は、芸大発16:40のバスに乗れるよう閉会する予定です。)

(社) 東洋音楽学会関西支部 第170回定例研究会の予告

日時：1994年9月17日(土)

会場：大阪芸術大学

(日本音楽学会関西支部第253回例会と合同)

研究発表

(発表者未定)

音楽学フォーラム

「フィールドワークされる日本音楽」

シルヴァン・ギニヤール、ヘンリー・ジョンソン、マルティ・イ・ペレス、

櫻井哲男

\*本定例研究会の未定部分の内容詳細は、追ってご案内いたします。

## 第167回定例研究会研究発表要旨

### 江戸時代末期の雅楽演奏の実態について

南谷 美保

『明治選定譜』に収録された雅楽曲と、その成立以前に実際に演奏されていた雅楽曲のレパートリーとはどのような関係にあるのであろうか。この疑問を明らかにすべく、筆者は、京都大学附属図書館および島根県八束郡宍道町の「八雲本陣」が所蔵する江戸時代から明治初期に記された雅楽譜計38冊に記載される曲目と、江戸時代末期、天保15年から明治5年にかけて東儀文均が記した日記である『楽所日記』に残される雅楽演奏記録とにより、江戸時代末期に実際に演奏されていた雅楽曲のレパートリーを確定しようと試みた。

その結果、当時の雅楽曲のレパートリーを総称した用語が、江戸時代の雅楽譜・楽書にしばしば記される「八十八曲」であり、『楽所日記』には、この「八十八曲」に含まれる雅楽曲すべての演奏記録があることから、これらは、当時、実際に演奏されていた曲目であると考えられる。さらに、この「八十八曲」に含まれていない〈蘇合香三帖〉および〈蘇合香破〉さらに〈万秋楽破〉についても、『楽所日記』に演奏記録が残されることから、江戸時代末期に実際に演奏されていた雅楽曲は、いわゆる「八十八曲」に、上記3曲を加えたものであったと考えられる。

次に、江戸時代末期に実際に演奏されていた雅楽曲のレパートリーと、『明治選定譜』に収録された曲目との関係についても考察しておかなければなるまい。結論を簡明に述べると、明治9年と明治21年の2回の選定作業を経て『明治選定譜』に収められた曲目というのは、江戸時代に実際に演奏されていたと考えられる「八十八曲」と〈蘇合香三帖〉・〈蘇合香破〉・〈万秋楽破〉に、さらに、江戸時代末期にはほとんど演奏されることがなかったと思われる〈五常楽序〉を加えたものなのである。したがって、『明治選定譜』は、江戸時代末期まで実際に演奏されていた曲目、つまり明治初年においても一般的なレパートリーとされていたであろう雅楽曲を取めた楽譜であると考えられるのである。

## 第168回定例研究会研究発表要旨

### パキスタン北部バルティスタンの音楽について

岡田 千歳

バルティスタン (Baltistan) は、パキスタン北部にありカラコルム山脈への入口の町スカルドを中心とした地域である。民族的には隣のラダック (現在インド領) と同様チベット系で言語もシナ・チベット系のバルティ語を話す。現在は住民の殆どがイスラム教徒であり、イスラム文化の中で生活している。イスラム文化と民族のもつチベット文化の交錯の中で音楽がどの様に継承されているのか興味を持った。

今回は1977年にカラコルム登山隊の一員としてスカルドからバルトロ氷河を訪れた際の記録を中心にまとめてみた。ポーターとして雇ったバルティスタンの人々は楽器は何も持っていないが、実によく歌い踊った。歌には大別すると歌だけのものと、踊りが加わるものと2種類ある。構成は同じ音頭形式で、最初の部分のソロは非常にゆっくり浪々と歌い、次に全員で少しテンポをあげて別のメロディーを歌う。歌詞を変えて数回繰り返しながら次第にテンポをあげ熱狂的に歌った後、最後に非常にゆっくり歌い終始感を強める。どの場合も歌の後に短い祈りの言葉が唱えられる。メロディーや歌詞は異なるが構成は大体以上のように、全体にメリスマは少なく長い音に関しても修飾は殆どない。また人数の増減に係わらず全て斉唱である。一方踊りが加わる場合だが、バルティダンスと呼ばれるこの地方独特の踊りには必ず2拍子系の手拍子がつく。序唱が終ると手拍子が入り、踊りが始まる。激してくるとかなり長く同様のメロディーが繰り返される。

これとは別にバルティスタンにはフンザから音楽職能集団ベリチヨがやってきて、祝祭日の音楽を担当していた。楽器はオーボエ系のスルナ、ケトルドラムのダーマル、両面太鼓のダーダンである。ベリチヨが演奏したバルティダンスのリズムは、ラダックのチベットダンスのリズムと共通するものがあり、民族の底流を感じさせる。

第168回定例研究会連続講座<音の今昔>要旨

アラブ社会の音と人 - シリア正教会聖餐式の音世界をめぐって -

栗倉 宏子

西アジアのアラブ社会には、さまざまな民族・宗派集団の存在がある。私はこれまで十数年にわたって、これらの民族・宗派集団のひとつシリア正教会の、音にかかわる伝統文化を追いかけてきた。今回は、テープおよびレコードからのフィールドでのダヴィングによって得られた録音資料も含めて、1960年から1992年まで10点の聖餐式をとりあげ、32年間にわたるその音世界の変化を追ってみた。とりあげる聖餐式は以下のとおりである。

a. 1960年 エルサレム 前総主教イグナチウス・ヤコブ 世によってとりおこなわれたもの (1977 イラクのバグダッドにて録音テープよりダヴィング)、 b. 1972年 シリアのアレッポ; 聖アフテム大聖堂 (1977 イラクのモースルにて Syrian Orthodox Religion Committee製作のレコードよりダヴィング)、 c. 1977年 バグダッド、 d-1. 1984年 ダマスカス総主教座、 d-2. 1984年 ダマスカス総主教座、 e. 1985年 アレッポ; 聖アフテム大聖堂、 f-1. 1985年 アレッポ; 聖ゲウルギス教会、 f-2. 1985年 アレッポ; 聖ゲウルギス教会、 g. 1992年 アレッポ; 聖ゲウルギス教会、 h. 1992年 ダマスカス総主教座

以上の10点の聖餐式について、式次第の構成 ことば 人 音楽の様式 の各項目について変化を追ってみた。なお、ここでは、聖餐式を構成する総体としての音世界の変化に焦点をあてるため、聖餐式でうたわれる個々の旋律内容そのものについては触れないこととした。

第169回定例研究会連続講座<音の今昔>要旨

レベティカからライカへ - ギリシャ・ポピュラー・ミュージックの軌跡 -

大東 純子

「唄は世につれ、世は唄につれ」と言う。後者はともかく、前者は音楽とくに大衆の音楽と社会の関係の一側面を見事に言い表わしているように思う。レベティカは、みじめな現代を生きざるを得なかった多数のギリシャ人の「心の唄」的存在で、あの時そこで生きた人間をぬきにしては語れない。今世紀の初め、多少は明るいさざしが見えかけたギリシャ独立戦争に続く無謀なトルコとの戦争が決定的な失敗に終り、そのつけとして、小アジアに何世紀にもわたって住み着いていたギリシャ人が難民となって大量にアテネなどの都市に流入し、現代ギリシャは大きなお荷物をかかえて船出する。レベティカとは「レベテス (アウトサイダー) の (もの)」という意味で、小アジア難民がトルコで慣れ親しんだ風俗・習慣とともに、都市の下層民 (レベテス、マンゲスと呼ばれる) の文化として発展した。初期のレベティカは、スミルナ (イズミール) などにあつたカフェの洗練されたミュージシャンのスタイルと都市のスラムのチンピラ (マンゲス) のたまり場であつたテケ (トルコからもちこまれたハッシシを吸い、やはりトルコのサズ系のバグラマを掻き鳴らしてやり場のない感情を唄にした) のディーブなスタイルに分けられるが、次第に両者は融合・成熟し、50年代から60年代にはポピュラー音楽としてブームを迎える。かつてのゴロつきがスターとなり、レベティカが本来の泥臭さを失う70年代 (ちょうど軍事政権が倒れ、民主主義政権がスタートする)、ギリシャ・ポップスはライカ (文字通りポピュラーという意味) と呼ばれ始める。ライカはヨーロッパ的なアレンジやインストゥルメンテーションを採用したが、依然としてレベティカの感情をひきずっており、それがギリシャならではの味となっている。最近、わが国でも懐メロ・ヒット・バラードの特集番組が目につくが、ギリシャでも古い録音の覆刻CDが続々登場している。これらを利用し、サウンドに注目したギリシャ・ポップスの歴史を概説したい。

▽編集後記

連続講座〈音の今昔〉の要旨は、原則として、次回研究会分をまえもって掲載していますが、本号には、粟倉宏子氏ご担当の前回研究会未掲載分も、あわせて掲載しました。

▽例会・広報担当理事より

田中伸子さんが、参事を辞任されました。長いあいだ例会・広報関係のお仕事をお世話いただき、ありがとうございました。ひきつづき会員としてのご活躍をお祈りいたします。

▽今後の定例研究会開催予定

(会場未定。なお定例研究会は通常、土曜日午後に開催しています。)

第171回 1994年10月15日(土)

第172回 1995年2月

第173回 1995年4月

第174回 1995年6月

定例研究会での発表等を常時募集しています。下記の方法によりご応募ください。

\* 申込方法

連続講座、発表の種別(研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏など)、発表題目、使用希望機器、希望日、所属、氏名、連絡先を明記の上、下記宛ご送付ください。なお、申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますので、あらかじめご了承ください。

(下記お問い合わせ先のうち、水野の電話番号とファクシミリ番号がこれまでと異なっています。ご留意ねがいます。)

定例研究会のお問い合わせ

〒860 熊本市黒髪2-40-1 熊本大学文学部地域科学科 櫻井哲男

Te l. 096-344-2111内線2469

Fax. 096-366-6957(宿舎)

〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学 水野信男

Te l. 0795-44-2261

Fax. 0795-44-2259(水野宛と明記)

住所変更等連絡先

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付

(社)東洋音楽学会関西支部 葉書にてご連絡をお願いいたします。

発行：(社)東洋音楽学会関西支部

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付